(2) 他者への関心を回復する起点としての【「私」任せなかかわり】

そんな中学生が「スクラム」に参加すると【唐突な受容の試練】を受けることになる。いままで【してくれない】かかわりが生活の多くを占めていた中学生は，なぜこんなことを【してくる】のか理解できず，当惑する。

しかし，チューターや他の「スクラム」生による関わり方は【「私」任せなかかわり】である。すなわち，時間，情報，アイデンティティをはじめ他の「Scrum」生やチューターという資源をどう活用するかの裁量権は，拒否するという選択肢も含めて当人に委ねられている。

そうした他者からの関わりが継続的に提供され自分なりの反応を返すことができるようになっていく。受容できた【「私」任せなかかわり】は，『学校』や『家庭』では得られない共感できる情報を伴っている。このような情報に触れることで，【体感をもとにした「私」と「あなた」のつながり】を感じるようになる。

他者とのつながりを獲得した中学生は，『他者とのかかわりに見る「私」の可能性』を見出していく。【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】を感じ，少しずつ「スクラム」での自分に自信を持つようになり，他者と【「絡む」ことへの欲求】が芽生える。チューターの多様な人生経験に触れることで，あるいは自分と同じ境遇を持ちながらも生きている他の「スクラム」生の生き様に触れることで，「私にできることがまだあるかもしれない，こんな人生もあるんだ」といった【見えなかった選択肢の拡大】が起こり，人とのかかわりに対する価値観や行動様式が変化していく。また，他者が「私」に心を開いて話してくれたという事実自体が【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】を強化させていく。

(3) 【してくる】から【してくれる】へ，そして，【してくる】他者を待ちわびる「私」へ

こうした人間関係の中で，中学生は徐々に自分が抱く感情に自信を持つようになっていく。自分

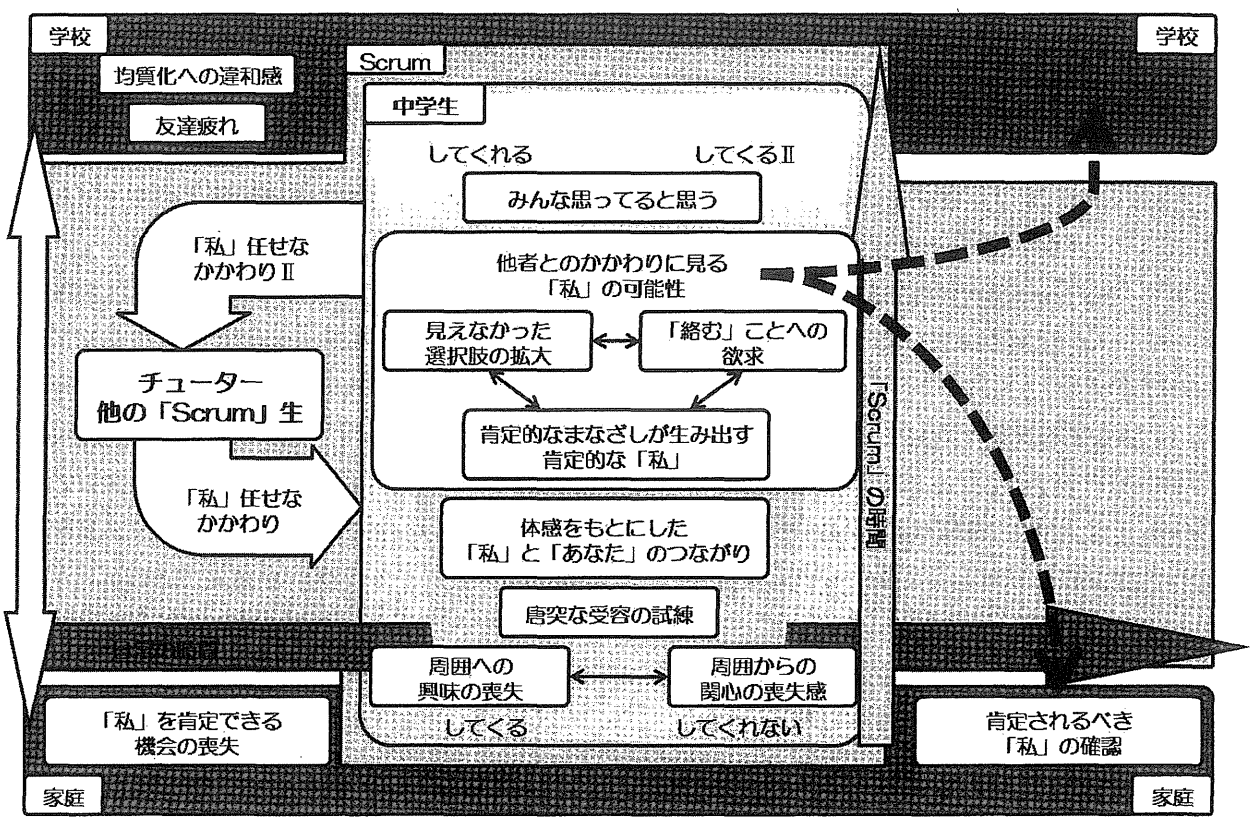


図１　事例における自己肯定感の獲得プロセス

が嬉しいことや苦しいことは，【みんな思ってると思う】ことに自信をもつ。他者と共感できる「私」を再発見したのである。

そうなってくると，当初はうっとうしい【してくる】ものであったチューターと他の「スクラム」生の【「私」任せなかかわり】は，中学生にとって【してくれる】になる。他者からの働きかけは，「私」への関心や配慮にもとづいたものだというふうに解釈軸が変化したのである。

さらにそれは，うっとうしい【してくる】かかわりさえも，されなければ寂しさを感じてしまう【してくる　phase. 2】へと発展していく。この変化を促したのが，【みんな思ってると思う】という，共感できた自分に対する信頼である。以上のようなプロセスを経て，他者からの関わりを受容でき，他者へ働きかけることができる自分に価値を認めるようになる。

自分の存在を肯定的に認めることができた中学生は，チューターや他の「スクラム」生に【「私」任せなかかわり】を働きかけ返す【「私」任せなかかわり phase. 2】を行うようになり，次世代のチューターとなっていく。

(4)　「スクラム」外への波及

また，本研究では，「スクラム」で得られた自己肯定感が，家族関係の変遷を促す事例も見られた。「褒めたら伸びるタイプなのかな」と自分を評価する夏樹さんは，中学校1年生頃までは家庭でも勉強をしていたという。しかし，「誰が褒めてくれるわけじゃないし，一人で虚しく勉強してて，なんか，つまんないかなと思って」やめてしまう。自分を肯定してほしい場面に期待通りの反応がもらえなかった。彼女にとって，『家庭』は自分を肯定してくれる場としての地位が低下していった。

そんな彼女は，「スクラム」に参加するようになって，再び家で勉強するようになる。チューターや他の「スクラム」生が努力する姿を認めてくれたからである。彼女に「スクラム」に来ての変化を尋ねると「家で勉強するようになった」と答えた。さらに，続けてこう語った。

> *夏：で，初めて家で勉強した時に，お母さんが，「ココア入れてあげる」っつって，いきなり，部屋入ってきて，ココア置いてってくれた。すんごいあん時感動した。*

「スクラム」に参加するなかで得た【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】は，彼女をして，再び家庭でも机に向かわせた。その変化に呼応するかのように，母親がココアの差し入れをしてくれた。このやりとりは，家庭においても【肯定されるべき「私」の確認】を果たしたことを意味する[12]。

終　章

事例には他者と共感できる情報や，学校や家庭とは異なる時間の流れ，評価軸が配置されていた。こうした資源に加えて，子どもの変化には，共感できる仲間と受容的な大人の存在が不可欠であった。

同じような境遇にあるがゆえに，わかりあえる同年代の他者は自己肯定感の獲得には不可欠であった。経験や感情に対する共感が，他者への関心を取り戻し，他者に共感できる自分の再発見を促す。

配慮ある大人もまた自己肯定感の獲得には不可欠であった。インタビューの対象となった子どもたちは事業への参加当初，スタッフの一方的かつ積極的なかかわりに戸惑っていた。しかし，そのかかわりに対する反応は，子どもたち側に委ねられていた。子どもたちたちはスタッフのかかわりに思い思いの反応を見せ，自己開示し，開示した自分が受容されていくことを実感していく。

最後に，事例で獲得された自己肯定感の質について触れておきたい。高垣(2004)は，自己肯定感を「共感的自己肯定感」と「競争的自己肯定感」とに区分する。前者が他者と共感できる存在としての「私」に対する信頼や肯定の感情を指し，後

者は他者との優劣の関係の中に自分の存在意義を見出すことである。「スクラム」の活動の興味深い点は，高校進学支援といういわば学歴競争社会におけるトラッキング・システムの一翼を担いながらも，そこでは「共感的自己肯定感」の獲得を促していた点にある。本研究が提出したモデルの厳密な適用範囲は「スクラム」に通い自己肯定感を獲得した中学生に限定されるが，それが競争的ではなく共感的なものであったのかについても間接的に示せたように思う。その意味で，他領域・他分野での応用が期待できるものであるといえる。

今後，獲得された自己肯定感が，どのように維持，変容していくのか，それを後押しする要因は何か継続的に調査していきたい。

引用文献

B.G.グレイザー＆A.L.ストラウス1967＝1996『データ対話型理論の発見』（後藤隆也ほか訳）新曜社

Wallman, Sandra1984福井正子訳　1996，『家庭の三つの資源』河出書房新書社

『教育』2010年８月号　座談会「『ありのまま』でいられる場をともにつくりだす」．国土社．

木戸口正宏 2009「ZっとScrum―進学支援のための学習会を通した子どもたちの居場所づくり」『住民と自治2009年』８月号，18-19頁

木下康仁2003『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実際』弘文堂

佐藤一子編『ＮＰＯの教育力』東京大学出版会．2004

城所章子・酒井朗 2006「夜間定時制高校生の自己の再定義家庭に関する質的研究-「編成資源」を手がかりに-」『教育社会学研究』，第78集　213-233頁

高垣忠一郎2004「生きることと自己肯定感」，新日本出版社

田中道弘1999「Rosenbergの自尊心項目に対する回答理由の研究」日本青年心理学会大会発表論文集 第７巻，29-30頁

中央教育審議会2008「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」，15頁

日置真世 2009「人が育ち合う『場づくり実践』の可能性と必要性：コミュニティハウス冬月荘の学習会の検討」『北海道大学大学院紀要』第107号

久芳美恵子・齋藤真沙美・小林正幸　2007「小，中，高校生の自己肯定感に関する研究」　東京体育大学紀要第42号，51-60頁

松井賢二2001「中学生の学校適応と進路（キャリア）成熟，自己肯定感との関係（Ⅱ）」　新潟大学教育人間科学部紀要　第４巻　第１号 237-247頁

松井賢二・佐藤優子2000「中学生の学校適応と進路（キャリア）成熟，自己肯定感との関係」　新潟大学教育人間科学部紀要，第３巻，第１号，157-165頁

注

[1] 本研究は，成澤の平成21年度卒業論文をベースにしている。本稿執筆に際して，成澤がリライトしたものをさらに添田が加筆修正した。

[2] 本稿では，高垣の議論を参考に自己肯定感を「弱さやいたらなさを含めた自分の全存在に対する肯定的な感情」と定義する。

[3] 会場のコミュニティハウス冬月荘は，厚生労働省が全国に設置を進めているフレキシブル・センターのモデルとなった取り組みである。「スクラム」についても，NHKの全国放送などでも貧困の連鎖を断ち切る先進事例として紹介されている。

[4] 「スクラム」については，日置（2009）や木戸口（2009）の報告がある。また『教育』2010年８月号では当事者による座談会が掲載されている。

[5] 成澤は2009年１月，添田は2009年２月より。

[6] 分析者側の力量を鑑み，深く厚みのある分析を行うために，著者たちからみて最も変化した３名に絞りこんだ。

[7] 半構造化インタビューとは，構造化インタビューと非構造化インタビューの中間に位置するインタビューの形式である。前者は語りの主導権を調査者が完全に掌握し，事前に用意しておいた質問項目や流れに沿って行う。後者は，対照的に，語り手に語りの主導権を完全に委ねるものである。半構造化インタビューの場合，質問の柱を用意しつつも，語り手にある程度の主導権を委ね，臨機応変に対応するものである。ディティールの豊富なインタビュー・データを必要とするM-GTAにおいては，半構造化インタビューが適していると言われている（木下2003）。

[8] このアイデアは，定時制高校において生徒が自己を再定義していくプロセスを描いた城所・酒井（2006）を参考にした。

[9] M-GTAの手順を概略すると次の通り。半構造化インタビューで得られたデータから分析ワークシートを用いて具体例の対照性や類似性に注意しながら「概念」を生成・精査していく。概念間の継続的比較検討のすえ，上位概念となるカテゴリーを抽出する。最終的に，概念とカテゴリーを組み合わせて，事象の説得的なス

トーリーラインを描いていく。詳細は，木下（2003）を参照。

[10] とくにインフォーマントの一人である康平君は次のような感想をくれた。「サンゴ（成澤）ありがとう。おれ自身，ごちゃごちゃしていたのがすごくすっきりした」。

[11] ちなみに，成澤は，「サンゴ」，添田は「フジイタカシ」。

[12] 学校での変化に関するデータは，今回は得ることができなかった。インフォーマントが3名と少数であったので，場合によっては生じていたのかもしれない。今後の検討課題である。

（成澤　弘明　釧路校大学院生）
（添田　祥史　釧路校講師）

生成された概念一覧表

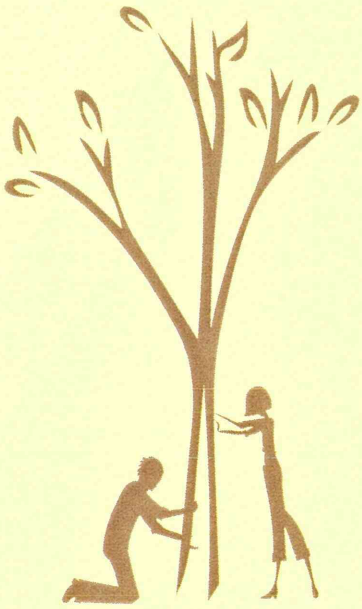
概念No.	概念名	定　　義	カテゴリー	具体例の一例（ヴァリエーション）
01.	友達疲れ	友達の関係を維持するため，また，仲良くしてもらうために「仲良くしてもらえるように」振る舞わなければならない日常に疲れてしまうこと。「仲良くしてもらえるようなこと」をするかどうかの選択は本人に委ねられる。	学校	成：ふぅん。学校に？ 康：そう。あの，自分から，こう，仲良くしたいなぁって奴もいないし。かといってこう，仲良くしてもらえるようなこともしなかったから。なんか，なんだろう。む，群れ合うのが嫌だった。
13.	均質化への違和感	一定の価値基準が設けられ，その空間での在り方へ誘導しようとするかかわりを受けることへの抵抗を感じること。		康：学校ってのは，あの，だ，たいてい同じ人ができる。その同じ人っていうのは学校の指定する，理想像なの。
20.	「私」を肯定する機会の喪失	本来，肯定されるべき一面がかかわりのない状態に置かれることで意味を持たない一面へ変わってしまい，肯定する判断の上に置かれることがなくなってしまうこと。	家庭	夏：誰が褒めてくれるわけでもないし，一人で虚しく勉強してて，なんか，つまんないなと思って，家で勉強しなかったんだけど。
21.	肯定されるべき「私」の確認	肯定的に評価された自分が，別の場所でも肯定的に評価されることで，自分の肯定的に評価される側面に確信を持つこと。		夏：初めて家で勉強した時に，お母さんが，「ココア入れてあげる」っつって，（略）ココア置いてってくれた。
05.	周囲への関心の喪失	周囲にいる人などに関わる動機がないこと。また，動機がないことに対して違和感をもたない状態のこと。	避難としての無干渉	成：何で？ 夏：学校の地味な人と話す気になんないもん。
10.	避難としての無干渉	相手のかかわりに対して自分の中に何も見出せない状態。相手とかかわることでなんらかの害を被るため，かかわりを持たない場合も含む。		夏：なんか，冬月荘きたら，そういう子が少ない。みんなおもしろい人で，限られてて。でも，学校行ったらまったく他人の人ばっかりだから，なんか共感を得れない。
14.	周囲からの関心の喪失感	周囲の態度から自分への関心を向けられていないと思うこと。また，自分の周囲への興味のなさを投射した結果，周囲から関心をむけられていないと思う場合も含む。		成：なるほど。笑顔か。学校の教室に笑顔はない？そうやって。 康：ないわけじゃないけど，なんかこう，来たら「おうおう」みたいな。あのねぇ，愛のねぇ，反対語はねぇ，無関心なの。

概念No.	概念名	定　　義	カテゴリー	具体例の一例（ヴァリエーション）
08.	見えなかった選択肢の拡大	これまで生きてきた中で，実現したいと思いもしなかった現状が，「Scrum」で実現する現象。実現したいことがあって，それは実現できるかどうかを考えるのではない。実現した後に，はじめてそれが実現したかったことに気付く。	他者とのかかわりに見る「私」の可能性	康：まぁ，当たり前っちゃ当たり前なんだけど。こんなに簡単だと思ってなかったのさ。個性を認められるのが。
11.	他者とのかかわりに見る「私」の可能性	他者とのかかわりに自分の変わることができる可能性を見出すこと。		康：こんなにも出会いと機会と，（略）喜びと，時には悲しみもあるけれど，それもまたいいことで，自分っていう存在が成長する一つのステップにもなるのに，それを全部カットするってのは，ホントにすごいもったいないこと，だと，思うんだ。
17.	絡むことへの欲求	ばらばらの関係を「つなぎとめたい」動機をもつこと。また「つなぎとめてほしい」と願望を持つこと。		康：全然違うように見えて，ここでは絶対あの，絡み合うんだよね。も，もしくは絡み合うようにする？
18.	肯定的なまなざしが生み出す肯定的な自分	「Scrum」の大人による放任に対して，肯定的な側面を見せることで承認され，その場にいる権利を得ること。		成：ほう。ウザいんだ。 康：（略）でもさ。「やぁ，康平すげぇな」ってこう，タカさんがさぁ。「お前すげぇな」って。
15.	「みんな思ってると思う」	自分が感じていることを，他者も感じているであろうと，共感した経験をもとに自分の感情に確信を持つこと。	「みんな思ってると思う」	麗：（略）直接っていうか言葉には表わしてありがとうとか言えないけど，でも，絶対みんなは思ってるはずなんだよね。
19.	形式を問わない肯定的側面の評価（概念21.へ統合）	当事者の行動の質に関わらず，行動を成立させる要因のうち肯定できる要因を正当に評価すること。	－	
09.	体感をもとにした「私」と「あなた」のつながり	個体として切り離されている自己と他者の関係に，似た環境が生み出す境遇を味わったことをもとにすることで，感じ方に共通性が見られ，他者との話に動機を見出すこと。	体感をもとにした「私」と「あなた」のつながり	康：（略）母子家庭であることが絶対条件だったんだよね。だから，そういう境遇だから，何となくそんな話になって。うん。辛いよねつってこう。

概念No.	概念名	定　　義	カテゴリー	具体例の一例（ヴァリエーション）
04.	「してくれない」	当事者が相手に対して，してほしい要求を持つとき，当事者の中で，その要求が果たされないものとして定義づけられる行為のこと。	中学生の受容の形式	康：（略）学校のみんなはあれなんだよ。理解しあえない奴らだと思ったからなんだよ。で，今も知ってるんだよね。（略）理解してくれないんだろうなぁって。
02.	「してくれる」	当事者の内心にある，あるいは，当事者自身に意識されない要求を推し量り，当事者が要求しなくとも要求を満たす行為のこと。		夏：自分のためだけじゃないけど，（略）誰かがあそこまでしてくれるってすごい。
03.	「してくる」	当事者が要求するに至らず，むしろ不必要なものとして把握していた働きかけを半ば強制的に働きかけること。		康：（略）関係を持とうってするってことが，あっちからしてくるもんだから(略)
03'.	「してくる」phase.2	当事者が要求するに至らず，しかし，なければないで，もの寂しくなる働きかけのこと。		康：（略）腕相撲したっけ，勝って，で挑んでくるようになってきたから（略）
06.	唐突な受容の試練	かつてない他者の一方的なかかわりを経験し，かかわりに対する反応に戸惑い，思考停止，憤りなどの感情の起伏を持ち，場に対して自分なりの見解を見出さなければ存在していられない状況のこと。	唐突な受容の試練	康：あのね，解けてったって，徐々にじゃないの。 成：徐々にじゃないの？ 康：ぶっ壊されたの。
07.	「私」任せなかかわり	当事者が他者から働きかけられたとき，その反応の内容は当事者に委ねられるかかわりのこと。	「私」任せなかかわり	康：（略）ほんと俺が必要としなかた関係を持とうってすることが，あっちからしてくるもんだから（略）でもなんかこう，徐々にこう，話の合う部分ができて。
12.	「私」任せなかかわりphase.2	「おそらく相手はこう思っているであろう」ことを確信しつつ，相手にそう思っていることを確認しないままに，自分の核心を基盤に相手に行為をはたらきかけること。自分の感覚に疑いがないことが前提としてある。	「私」任せなかかわりPhase.2	康：（略）あの，自分にとっての「Scrum」と，あと，周りにいる人にとっての「Scrum」は，あのぉ，その空間内で，あの，なんだろう，こうお互いの感謝の心を共有できる。（略）
16.	異次元としての「Scrum」	自分のアイデンティティを場によって変更すること。その場に適応するためのアイデンティティがあり，別の場所でそのアイデンティティは通用しない，あるいは強い抵抗を示す。	異次元としての「Scrum」	康：ここで突然会うから始まるんだよ。（略） 康：学校でその関係を維持できるかっても，それは無理なんだよ。

厚生労働科学研究費補助金　政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業）21010901
「生活保護受給世帯の就労自立を促す成人基礎教育カリキュラムの開発」第１年次成果報告

稼働年齢層における生活保護受給者の生活実態に関する調査報告書



平成 22 年３月

研究代表者　添田祥史

目次

調査の目的と方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

成果の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

本調査の協力自治体 ・・・・・・・・・・・・・・・ 4

問 1：年齢 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

問 2：最終学歴 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

問 3：同居家族 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

問 4：生活保護受給開始時期 ・・・・・・・・・・ 11

問 5：過去の生活保護受給有無 ・・・・・・・・・・ 13

問 5-1：過去の生活保護受給回数 ・・・・・・ 15

問 6：ケース・ワーカー訪問回数 ・・・・・・ 17

問 7：「自立支援プログラム」参加有無 ・・・・・・ 20

問 8：就労の可能性 に対する意識・・・・・・・・・ 22

問 9：就労への不安要素 ・・・・・・・・・・・・・ 25

問 10：近隣との関係 ・・・・・・・・・・・・・・ 27

問 11：最近一カ月で世間話をした相手 ・・・・・・ 29

問 12：生活で頼りになる関係 ・・・・・・・・・・ 31

問 13：気を使わずにつきあえる人数 ・・・・・・ 32

問 14：生活の流れ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

問 15：日課の有無 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

問 15-1：日課の内容（自由記述）・・・・・・・・・ 40

問 16：就労に結びつくアイデア（自由記述）・・・ 43

資料　アンケート用紙・・・・・・・・・・・・・・・ 45

調査の目的と方法

本報告書は、稼働年齢層における生活保護受給者の生活実態に関するアンケート調査の集計結果である。この調査は、厚生労働省科研費「生活保護受給者の就労自立を促す成人基礎教育カリキュラムの開発」（研究代表者：添田祥史）の一環として行われた。就労自立にいたるプロセスを成人の学習過程として位置付け、そのために必要なスキルや知識に対する援助実践を成人の基礎教育として体系化・理論化を試みようとするものである。最終的には、実際に職員が就労支援プログラムを作成する際に、参照できるような現場に根ざしたカリキュラムを提案することが目的である。

アンケート調査の方法は次の通りである。対象は、旧産炭地を抱える市に暮らす稼働年齢の生活保護受給者とした。地域経済が厳しく、財源や活用できる社会資源も限られた中で、どのようなプログラムが可能かを考える基礎資料がほしかったためである。調査対象者へのアクセスは次のような手順を採用した。各福祉事務所に稼働年齢層にある生活保護受給者でかつ障害や疾病のない方を抽出してもらい、担当ケース・ワーカーの訪問時に、生活保護受給者当人からアンケートを実施・回収してもらった。

2009 年 12 月中旬から実施してもらい、回収まで約 1 ヶ月を確保した。

北海道と福岡県の旧産炭地を抱える自治体の中から炭鉱規模等や地理的なバランスを考慮しつつ、調査協力自治体のリストを作成し、電話での調査趣旨の説明後、検討いただける自治体に書面とアンケート用紙を送付した。恒常的な人手不足に加えて、昨今の不況の影響から現場は多忙を極めており、半数以上の自治体から辞退の連絡があったが、北海道と福岡県から各 4 自治体、合計 228 名のサンプルを得ることができた。ご協力いただいた皆様に、この場をお借りして、感謝申し上げたい。

成果の概要

本研究の目的に即して、興味深かった結果を確認しつつ、就労支援上の課題を４点にわたり述べることにしたい。なお、サンプル数や調査方法において、本調査は十分な信頼性と妥当性を担保しているとは言い難い。しかし、稼働年齢層の生活実態を伺い知る基礎資料としては、十分に共有する価値はあると思う。

まず、明らかになったことは、働くための基礎学力保障の必要性である。最終学歴は、中卒４割、高卒３割強であった。小学校以下のものが１％ほどいた。若年層には高校中退者も目立つ。また、低学暦ほど、過去に複数回受給を受けていたという答えが多かった。この背景には、教科学力不足に加えて人間関係を築く能力や自律的に行動する力を未獲得なまま社会に出されている状況が推測される。それらの力も含めて学びなおす環境の整備が求められる。その際、ユネスコが提唱する「機能的リテラシー」という概念が参考になる。「機能的リテラシー」とは、狭義の読み書き算だけではなく、人々が社会の一員として基本的な生活能力を獲得したり社会参加をおこなったりするうえで必要不可欠とされる読み書き能力をさす。ここには、批判的に社会の情勢を読み解く力や図解の読解力、論理的思考力なども含まれる。

２点目は、社会関係の再構築の必要性である。社会関係を編み直す機会や仲間づくりを意識した就労支援プログラムが用意されてよい。単身世帯が半数を占め、40 代以上がとりわけ多いという特徴がみられた。気をつかわずにつきあえる人が０名との回答が 14%、生活で頼りになる人が０名との回答が 16%に及んだ。近隣との関係をたずねたところ「つきあいはない」との回答が３割近くにのぼった。最近１ヶ月間、世間話をしたことがない人も数名いた。とくに、中年層は人間関係が希薄になりやすい傾向がみられた。具体的

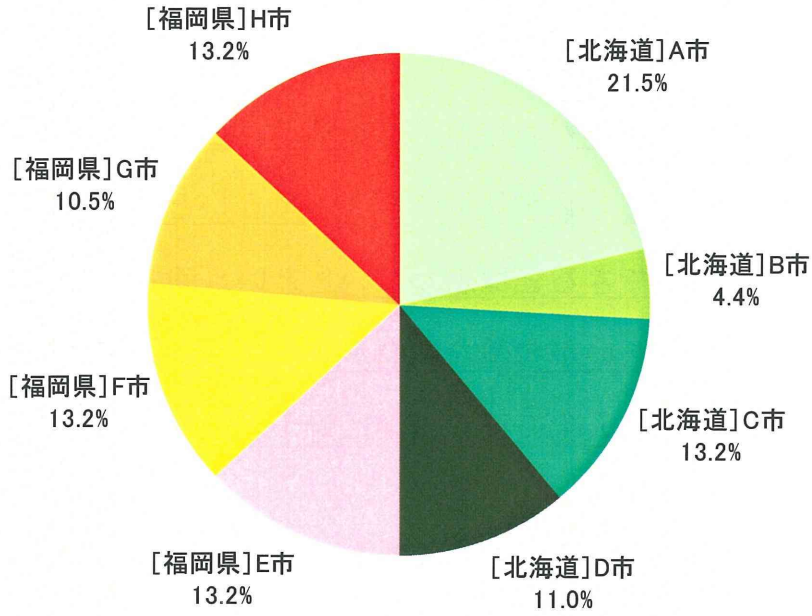
な他者を前にして初めて、私たちは社会とのつながりや自己を意識することができる。ひとりではないことが体感できてこそ、再チャレンジしようとする意欲や勇気が生まれるのではないだろうか。

３点目は、生活の質に関わる問題である。回答者の多くは規則正しい生活を送っているようにみえる。しかし、それは必ずしも充実したものとは言い難い。自由時間は平均 6.7 時間であるにも関わらず、日課が「ない」が６割を占めた。睡眠時間は平均 8.7 時間、10 時間以上が２割を占めた。注目すべきは、生活の質と就労への意識とには相関がみられることである。睡眠時間や自由時間が短いほど「必ず就労できると思う」という回答は多くなり、長くなるほどに「就労できるとは思わない」という回答が増えた。日課をもたない人は、近所づきあいが希薄な傾向がみられた。まず、自らの生活の主体となることが、自らの人生や社会参加に対する意欲を喚起させる第一歩になるのかもしれない。

４点目は、現行の就労支援プログラムの運用と評価をめぐる問題である。ハローワークとの連携による就労支援以外のプログラムの実施はいまだ少ない。ハローワーク連携型の参加者は「必ず就労できる」が３割強、「たぶん就労できる」が６割強である。他方、就労体験型のプログラムは、３割強のひとが「就労できるとは思わない」と回答している。これをどう評価すべきか。地域経済が冷え込んでいる地方都市において、就労先をみつけるのは極めて厳しい。そのような地域で、「就労できるとは思わない」と思いながらも、プログラムに参加し続けているという事実に着目したい。就労へのあきらめが、社会や他者や自分に対する関心につながりかねない状況をかろうじて回避していると評価できまいか。就労による保護廃止数のみを事業評価としない多面的な評価軸の開発が求められる。

本調査の協力自治体

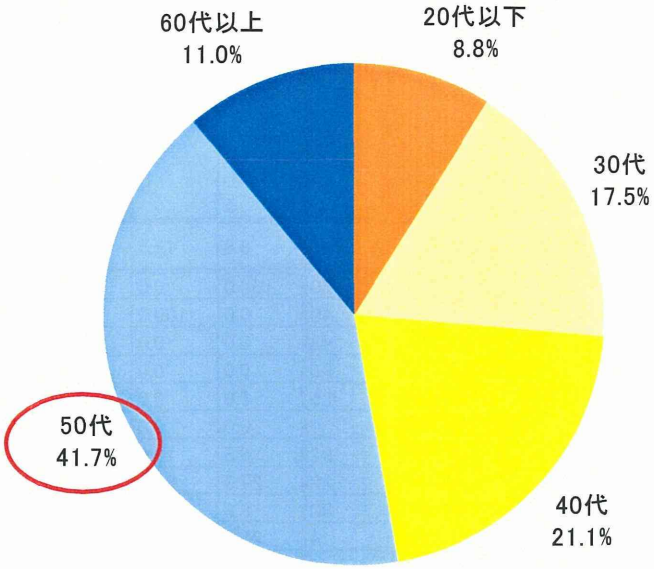
- 協力自治体では、「[北海道]A 市」が最も多く 2 割。他では「[北海道]B 市」を除き 1 割台となった。
- サンプルの割合は、北海道と福岡県で約半数ずつ。



	n=	[北海道]A市	[北海道]B市	[北海道]C市	[北海道]D市	[福岡県]E市	[福岡県]F市	[福岡県]G市	[福岡県]H市
全　体	228	21.5	4.4	13.2	11.0	13.2	13.2	10.5	13.2
北海道 計	114	43.0	8.8	26.3	21.9	0.0	0.0	0.0	0.0
福岡県 計	114	0.0	0.0	0.0	0.0	26.3	26.3	21.1	26.3

問 1－Ⅰ：年齢（実数回答）

・ 年齢を年代ごとにみると、「50 代」が最も多く 4 割を占めた。
次いで「40 代」「30 代」が 2 割となった。



		n=	20代以下	30代	40代	50代	60代以上
全　体		228	8.8	17.5	21.1	41.7	11.0
北海道 計		114	7.9	14.9	18.4	38.6	20.2
福岡県 計		114	9.6	20.2	23.7	44.7	1.8
協力自治体別	[北海道]A市	49	14.3	22.4	20.4	32.7	10.2
	[北海道]B市	10	0.0	0.0	30.0	40.0	30.0
	[北海道]C市	30	3.3	6.7	10.0	40.0	40.0
	[北海道]D市	25	4.0	16.0	20.0	48.0	12.0
	[福岡県]E市	30	16.7	23.3	16.7	43.3	0.0
	[福岡県]F市	30	10.0	23.3	26.7	36.7	3.3
	[福岡県]G市	24	0.0	16.7	20.8	62.5	0.0
	[福岡県]H市	30	10.0	16.7	30.0	40.0	3.3

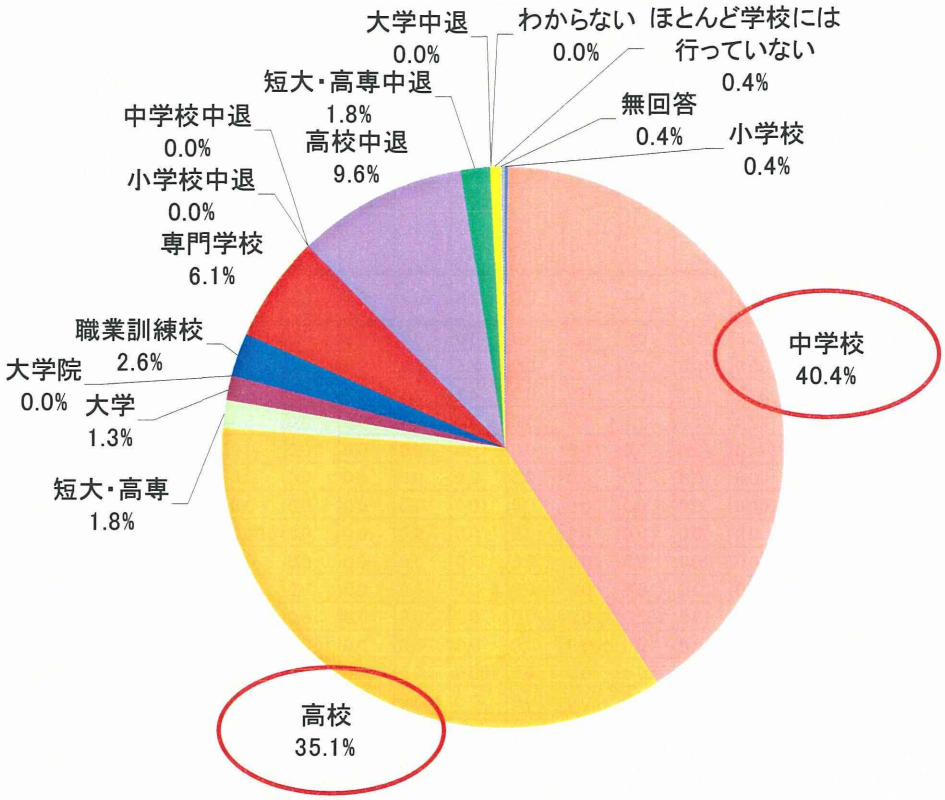
問 1-Ⅱ：年齢

・　近隣関係別で「つきあいはない」をみると、「50 代」が 4 割と高い傾向となった。

		n=	20代以下	30代	40代	50代	60代以上
全　体		228	8.8	17.5	21.1	41.7	11.0
年代別	20代以下	20	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	30代	40	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	40代	48	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
	50代	95	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
	60代以上	25	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
最終学歴別	小学校	1	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
	中学校	92	6.5	13.0	19.6	48.9	12.0
	高校中退	22	27.3	27.3	22.7	22.7	0.0
	高校	80	8.8	20.0	25.0	37.5	8.8
	短大・高専中退	4	25.0	0.0	25.0	50.0	0.0
	短大・高専	4	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0
	大学	3	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
	職業訓練校	6	0.0	16.7	33.3	0.0	50.0
	専門学校	14	0.0	21.4	7.1	42.9	28.6
	ほとんど学校には行っていない	1	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
同居家族別	単身	118	2.5	4.2	20.3	55.9	16.9
	配偶者	30	3.3	23.3	26.7	36.7	10.0
	本人の母親	16	31.3	25.0	25.0	18.8	0.0
	本人の父親	2	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	息子	58	15.5	46.6	19.0	17.2	1.7
	娘	46	19.6	39.1	26.1	13.0	2.2
	配偶者の母親	1	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
	本人の兄弟	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	本人の姉妹	2	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	その他の親族	5	20.0	0.0	20.0	60.0	0.0
受給暦別	昭和以前	8	37.5	0.0	0.0	25.0	37.5
	平成元年～15年	38	5.3	28.9	18.4	36.8	10.5
	平成16年	13	0.0	23.1	7.7	61.5	7.7
	平成17年	18	5.6	27.8	11.1	38.9	16.7
	平成18年	11	18.2	9.1	36.4	27.3	9.1
	平成19年	26	11.5	11.5	23.1	42.3	11.5
	平成20年	35	11.4	11.4	28.6	31.4	17.1
	平成21年	71	7.0	16.9	23.9	46.5	5.6
近隣関係別	つきあいはない	41	17.1	17.1	19.5	41.5	4.9
	道で会えばあいさつぐらいはする	106	8.5	16.0	22.6	41.5	11.3
	出会ったときに少し世間話をする	51	7.8	25.5	15.7	41.2	9.8
	ときどき、お互いの家をたずねあう	16	0.0	6.3	25.0	37.5	31.3
	かなり頻繁にお互いの家をたずねあう	1	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
	家族同様といえるくらい親しくつきあっている	4	0.0	0.0	25.0	50.0	25.0

問 2-Ⅰ：最終学歴

・ 最終学歴では「中学校」が最も多く 4 割を占め、次いで「高校」が 3 割半となった。



		n=	小学校	中学校	高校	短大・高専	大学	大学院	職業訓練校	専門学校	小学校中退	中学校中退	高校中退	短大・高専中退	大学中退	わからない	ほとんど学校には行っていない	無回答
全　体		228	0.4	40.4	35.1	1.8	1.3	0.0	2.6	6.1	0.0	0.0	9.6	1.8	0.0	0.0	0.4	0.4
北海道 計		114	0.0	45.6	28.9	0.9	1.8	0.0	4.4	6.1	0.0	0.0	9.6	1.8	0.0	0.0	0.0	0.9
福岡県 計		114	0.9	35.1	41.2	2.6	0.9	0.0	0.9	6.1	0.0	0.0	9.6	1.8	0.0	0.0	0.9	0.0
協力自治体別	[北海道]A市	49	0.0	32.7	38.8	2.0	2.0	0.0	2.0	8.2	0.0	0.0	12.2	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0
	[北海道]B市	10	0.0	60.0	30.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[北海道]C市	30	0.0	46.7	23.3	0.0	0.0	0.0	13.3	3.3	0.0	0.0	6.7	6.7	0.0	0.0	0.0	0.0
	[北海道]D市	25	0.0	64.0	16.0	0.0	4.0	0.0	0.0	4.0	0.0	0.0	12.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[福岡県]E市	30	0.0	46.7	43.3	0.0	0.0	0.0	0.0	6.7	0.0	0.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[福岡県]F市	30	0.0	23.3	50.0	6.7	0.0	0.0	0.0	3.3	0.0	0.0	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[福岡県]G市	24	4.2	50.0	29.2	0.0	0.0	0.0	4.2	0.0	0.0	0.0	8.3	0.0	0.0	0.0	4.2	0.0
	[福岡県]H市	30	0.0	23.3	40.0	3.3	3.3	0.0	0.0	13.3	0.0	0.0	10.0	6.7	0.0	0.0	0.0	0.0

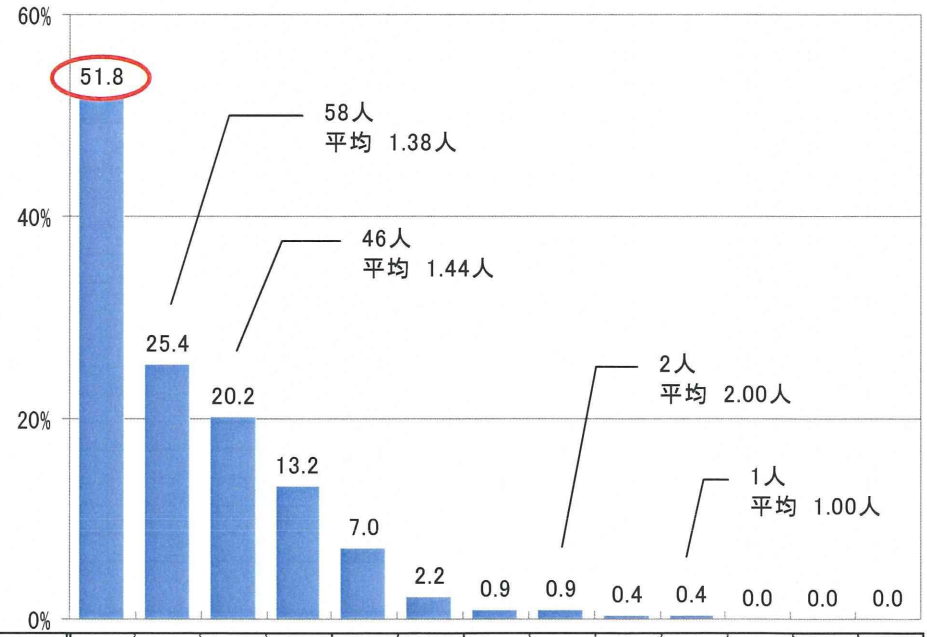
問 2-Ⅱ：最終学歴

・「年代別」でみると、「中学校」では年齢が高くなるにつれて、増加している。
また、「高校」「高校中退」では逆に年齢が高くなるにつれて減少傾向となっている。

		n=	小学校	中学校	高校	短大・高専	大学	大学院	職業訓練校	専門学校	小学校中退	中学校中退	高校中退	短大・高専中退	大学中退	わからない	ほとんど学校には行っていない	無回答
全体		228	0.4	40.4	35.1	1.8	1.3	0.0	2.6	6.1	0.0	0.0	9.6	1.8	0.0	0.0	0.4	0.4
年代別	20代以下	20	0.0	30.0	35.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	30.0	5.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	30代	40	0.0	30.0	40.0	5.0	0.0	0.0	2.5	7.5	0.0	0.0	15.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	40代	48	0.0	37.5	41.7	0.0	0.0	0.0	4.2	2.1	0.0	0.0	10.4	2.1	0.0	0.0	2.1	0.0
	50代	95	1.1	47.4	31.6	2.1	3.2	0.0	0.0	6.3	0.0	0.0	5.3	2.1	0.0	0.0	0.0	1.1
	60代以上	25	0.0	44.0	28.0	0.0	0.0	0.0	12.0	16.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
最終学歴別	小学校	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	中学校	92	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	高校中退	22	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	高校	80	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	短大・高専中退	4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	短大・高専	4	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	大学	3	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	職業訓練校	6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	専門学校	14	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ほとんど学校には行っていない	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0
同居家族別	単身	118	0.8	43.2	33.9	0.8	2.5	0.0	3.4	6.8	0.0	0.0	5.9	1.7	0.0	0.0	0.8	0.0
	配偶者	30	0.0	46.7	33.3	0.0	0.0	0.0	3.3	6.7	0.0	0.0	6.7	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3
	本人の母親	16	0.0	43.8	25.0	0.0	0.0	0.0	6.3	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	本人の父親	2	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	息子	58	0.0	36.2	32.8	5.2	0.0	0.0	3.4	6.9	0.0	0.0	12.1	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0
	娘	46	0.0	26.1	45.7	4.3	0.0	0.0	0.0	2.2	0.0	0.0	19.6	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0
	配偶者の母親	1	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	本人の兄弟	1	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	本人の姉妹	2	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	その他の親族	5	0.0	60.0	40.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
受給暦別	昭和以前	8	12.5	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0	12.5	12.5	0.0	0.0	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成元年～15年	38	0.0	50.0	31.6	0.0	2.6	0.0	2.6	5.3	0.0	0.0	7.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成16年	13	0.0	30.8	30.8	0.0	0.0	0.0	0.0	15.4	0.0	0.0	15.4	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成17年	18	0.0	44.4	16.7	0.0	0.0	0.0	5.6	22.2	0.0	0.0	0.0	5.6	0.0	0.0	0.0	5.6
	平成18年	11	0.0	45.5	36.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	18.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成19年	26	0.0	23.1	69.2	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成20年	35	0.0	51.4	25.7	5.7	0.0	0.0	2.9	2.9	0.0	0.0	11.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成21年	71	0.0	38.0	38.0	1.4	2.8	0.0	2.8	1.4	0.0	0.0	12.7	1.4	0.0	0.0	1.4	0.0
近隣関係別	つきあいはない	41	0.0	43.9	29.3	0.0	2.4	0.0	2.4	2.4	0.0	0.0	17.1	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0
	道で会えばあいさつぐらいはする	106	0.9	34.9	42.5	0.9	0.9	0.0	3.8	3.8	0.0	0.0	10.4	0.9	0.0	0.0	0.0	0.9
	出会ったときに少し世間話をする	51	0.0	35.3	35.3	3.9	2.0	0.0	0.0	11.8	0.0	0.0	5.9	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	ときどき、お互いの家をたずねあう	16	0.0	62.5	18.8	0.0	0.0	0.0	6.3	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	かなり頻繁にお互いの家をたずねあう	1	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	家族同様といえるくらい親しくつきあっている	4	0.0	75.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

問 3-Ⅰ：同居家族（複数回答可）

・　同居家族では「単身」が最も多く半数を占めている。次いで「息子」「娘」と子供が共に 2 割となった。



		n=	単身	息子	娘	配偶者	本人の母親	その他の親族	本人の父親	本人の姉妹	配偶者の母親	本人の兄弟	配偶者の父親	本人の祖父	本人の祖母
全　体		228	51.8	25.4	20.2	13.2	7.0	2.2	0.9	0.9	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0
北海道 計		114	53.5	18.4	18.4	14.0	7.0	0.9	0.9	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0
福岡県 計		114	50.0	32.5	21.9	12.3	7.0	3.5	0.9	1.8	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0
協力自治体別	[北海道]A市	49	42.9	32.7	30.6	10.2	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[北海道]B市	10	40.0	10.0	20.0	30.0	0.0	0.0	10.0	0.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[北海道]C市	30	83.3	3.3	3.3	10.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[北海道]D市	25	44.0	12.0	12.0	20.0	16.0	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[福岡県]E市	30	50.0	36.7	16.7	10.0	6.7	3.3	0.0	3.3	0.0	3.3	0.0	0.0	0.0
	[福岡県]F市	30	33.3	40.0	40.0	26.7	6.7	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[福岡県]G市	24	66.7	20.8	4.2	4.2	0.0	8.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	[福岡県]H市	30	53.3	30.0	23.3	6.7	13.3	0.0	3.3	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

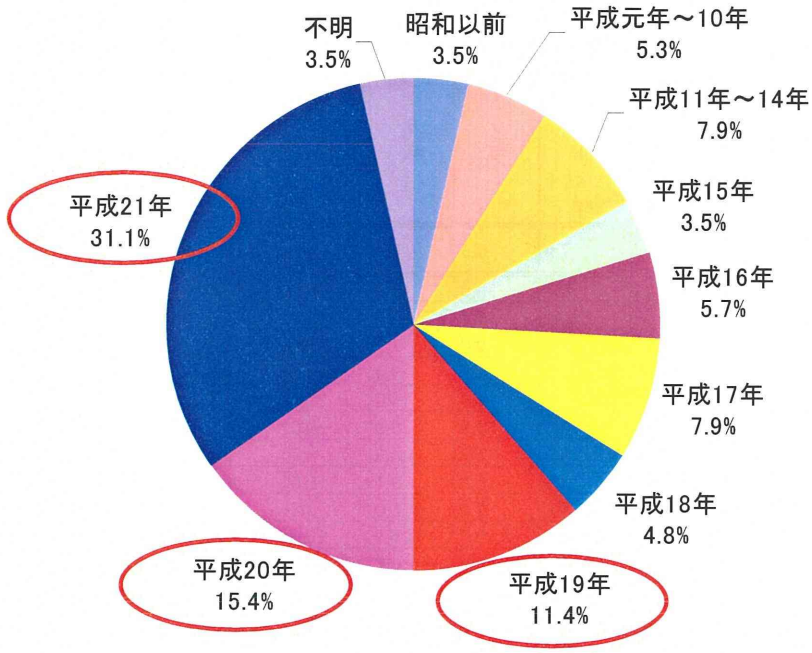
問 3-Ⅱ：同居家族（複数回答可）

- 年齢別で「単身」をみると、「30 代」以下では 1 割程度だが「40 代」以上では半数以上と大きく差が現れた。また、「息子」「娘」では逆に「30 代」「40 代」を境に減少した。
- 近隣関係別では「単身」が「つきあいはない」が 6 割を超えていた。

		n=	単身	息子	娘	配偶者	本人の母親	その他の親族	本人の父親	本人の姉妹	配偶者の母親	本人の兄弟	配偶者の父親	本人の祖父	本人の祖母
全体		228	51.8	25.4	20.2	13.2	7.0	2.2	0.9	0.9	0.4	0.4	0.0	0.0	0.0
年代別	20代以下	20	15.0	45.0	45.0	5.0	25.0	5.0	5.0	10.0	0.0	5.0	0.0	0.0	0.0
	30代	40	12.5	67.5	45.0	17.5	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	40代	48	50.0	22.9	25.0	16.7	8.3	2.1	2.1	0.0	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	50代	95	69.5	10.5	6.3	11.6	3.2	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	60代以上	25	80.0	4.0	4.0	12.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
最終学歴別	小学校	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	中学校	92	55.4	22.8	13.0	15.2	7.6	3.3	1.1	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	高校中退	22	31.8	31.8	40.9	9.1	18.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	高校	80	50.0	23.8	26.3	12.5	5.0	2.5	1.3	0.0	1.3	1.3	0.0	0.0	0.0
	短大・高専中退	4	50.0	50.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	短大・高専	4	25.0	75.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	大学	3	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	職業訓練校	6	66.7	33.3	0.0	16.7	16.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	専門学校	14	57.1	28.6	7.1	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ほとんど学校には行っていない	1	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
同居家族別	単身	118	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	配偶者	30	0.0	40.0	30.0	100.0	3.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	本人の母親	16	0.0	18.8	6.3	6.3	100.0	6.3	6.3	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	本人の父親	2	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	100.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	息子	58	0.0	100.0	43.1	20.7	5.2	3.4	0.0	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	娘	46	0.0	54.3	100.0	19.6	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	配偶者の母親	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	本人の兄弟	1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
	本人の姉妹	2	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	50.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	その他の親族	5	0.0	40.0	0.0	0.0	20.0	100.0	0.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
受給暦別	昭和以前	8	50.0	25.0	0.0	12.5	37.5	12.5	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成元年～15年	38	42.1	34.2	21.1	10.5	10.5	0.0	5.3	0.0	2.6	2.6	0.0	0.0	0.0
	平成16年	13	69.2	15.4	15.4	15.4	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成17年	18	27.8	38.9	33.3	27.8	5.6	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成18年	11	36.4	27.3	36.4	9.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成19年	26	57.7	19.2	26.9	3.8	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成20年	35	51.4	25.7	22.9	20.0	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	平成21年	71	57.7	21.1	14.1	12.7	8.5	2.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
近隣関係別	つきあいはない	41	65.9	17.1	12.2	4.9	7.3	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	道で会えばあいさつぐらいはする	106	50.0	24.5	20.8	13.2	9.4	2.8	0.9	0.9	0.9	0.9	0.0	0.0	0.0
	出会ったときに少し世間話をする	51	37.3	39.2	27.5	15.7	5.9	2.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ときどき、お互いの家をたずねあう	16	75.0	6.3	6.3	18.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	かなり頻繁にお互いの家をたずねあう	1	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	家族同様といえるくらい親しくつきあっている	4	75.0	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

問 4-Ⅰ：生活保護受給開始時期

・ 生活保護を受給し始めた時期としては、「平成 21 年」が最も多く 3 割を占めていた。
また、「平成 19 年」～「平成 21 年」の直近 3 年間で受給を開始した人が、半数以上となっている。



		n=	昭和以前	平成元年～10年	平成11年～14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	不明
全　体		228	3.5	5.3	7.9	3.5	5.7	7.9	4.8	11.4	15.4	31.1	3.5
北海道 計		114	2.6	6.1	9.6	3.5	5.3	7.9	5.3	10.5	20.2	23.7	5.3
福岡県 計		114	4.4	4.4	6.1	3.5	6.1	7.9	4.4	12.3	10.5	38.6	1.8
協力自治体別	[北海道]A市	49	0.0	4.1	8.2	2.0	2.0	12.2	6.1	18.4	16.3	26.5	4.1
	[北海道]B市	10	0.0	10.0	20.0	0.0	10.0	0.0	10.0	0.0	20.0	30.0	0.0
	[北海道]C市	30	10.0	0.0	6.7	6.7	10.0	10.0	3.3	6.7	23.3	20.0	3.3
	[北海道]D市	25	0.0	16.0	12.0	4.0	4.0	0.0	4.0	4.0	24.0	20.0	12.0
	[福岡県]E市	30	3.3	3.3	3.3	0.0	13.3	10.0	10.0	13.3	13.3	26.7	3.3
	[福岡県]F市	30	6.7	3.3	0.0	3.3	3.3	10.0	3.3	16.7	10.0	40.0	3.3
	[福岡県]G市	24	4.2	8.3	12.5	8.3	0.0	8.3	0.0	12.5	8.3	37.5	0.0
	[福岡県]H市	30	3.3	3.3	10.0	3.3	6.7	3.3	3.3	6.7	10.0	50.0	0.0